

り、また桑原博士「張騫の遠征」一三〇頁の註にも同様の旨が記されてある。

⑨ サマルカンドを中心とするソグド地方を Kang と謂ひしことは Shahnama に見え、Avesta の Kangha はこれに當るものと思はれる。Reinaud は Abulfeda の地理書を譯した時に既に康 Kang がこれに當ることを述べ、(同書卷一 CCXX-CCXXIII) Tomaschek もこれに同意を表してゐる。(Centralasiatische Studien, I. S. 136) マンジャの勇將クタインの中亞侵略當時にもサマルカンドのことを Kang といふ居たことは Marquart, Die Chronologie der alttürkischen Inschriften, S. 7 に Tabari を引いて記して居る所である。

⑩ Eränšahr 204-207.

⑪ Sieg, Einheimischer Name für Toxri.

⑫ 東洋學報第十一卷第四號所載、石田幹之助氏「フリードリヒ・ヒルト博士第七十五回誕辰祝賀記念論文集二種」中の六、フュイスト氏「トカラ人問題の現状」。支那學第二卷第五號所載、石濱純太郎氏同題。

⑬ F. W. K. Müller, Toxri und Kuisan (Küsan). SBPAW. 1918. S. 569.

⑭ ibid. S. 583-584.

⑮ Sten Konow, Beitrag zur Kenntnis der Indoskythen. (Ostasiatische Zeitschrift 1919-1920).

⑯ Bretschneider, Mediaeval Researches, II, p. 20- Yule, Marco Polo, I, p. 210.

⑰ 同上。

⑱ op. cit. S. 583.

⑲ 元史卷百二十四、哈刺赤哈赤北魯傳に、此の人がウイグル人で、ウイグル王に徴されて唆里迷國から出て斷事官となつたと謂ひ、また「從帝(太祖)西征、至別失八里東獨山、見城空無人。帝問此何城也。對曰獨山城。往歲大飢。民皆流移之。此所也。然此地當北來要衝。宜耕種以爲備。臣昔在唆里迷國。時有戸六十。願移居此。帝曰善。」云々と見える。

⑳ A propos des Comans, J. A. 1920, p. 181.